

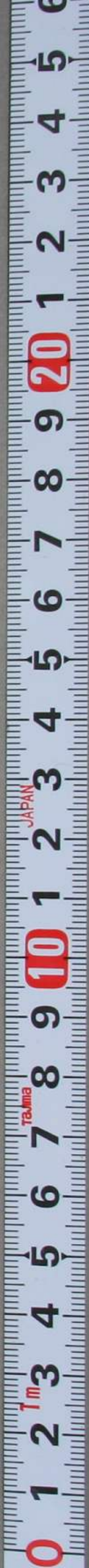


孫搢車錄奇緣

後編

四

八遠13
1579
9



門へ連13
番 1579
巻 9

絲櫻春蝶音縁卷之九

東都 曲亭馬琴編述

第十三段

神原夫妻礫川に隠る
三人酔客ト居と祝を

武藏の川高茅が原とせつとて言葉の花の咲白ひ倦ぬるが由の秋の
いそばの勢をたれ末の帯も後遊子漲る砥川借屋有屋の住居より吾ら
陝き浮せらるるさも秋七のいほる比思美ふそのを置難て小糸りりとの町る
糸屋を脱出せられも。さてより人の定るぬ棚亭小舟越にららるるを啣ち
の金留木小旅味とて西三言過はやく不執味九は由縁ある巨六が及る其甲子各
告むひて才の伎るはとて明地よ告るる人あはく懐く潜小巨六ふを。まを
巨六膝下へいぬ。日小綱五郎が往方るれどちりる。成る病苦くも折る。彼人の才



糸櫻春蝶音縁卷之九

初中後を定るまゝの文を以て武を演る。太平記おたのむ。その盃を抑ふ。

 あとのやせの敢ぞ。水右衛門押隔を直も。亦王が身勝手。太平記四十卷。南北朝と別。

 むひ。修羅戦場を瞭然と。終る。冊子ある。祝ふべく。愛ある。

 わるも吾儕が世と。獸の麒麟あり。勿異あり。千載の自孤。五百年来の玄鹿。

 されのいと多う。さる。五吾儕とす。と。誰のあ。これ。松清あり。

 吾儕よりいれ。三人茶碗と。半ひの面を。あ。の。共。小。明。と。ち。笑。ひ。ま。

 給ぬ。酒。名。辨。け。い。し。も。人。も。愚。く。や。亭。主。の。お。ま。ま。の。内。の。お。の。り。心。

 抑。ま。ぬ。の。滅。却。水。右。衛。門。い。れ。も。あ。ぬ。奥。の。あ。と。い。ひ。せ。乳。鉢。も。と。て。お。

 茶碗。も。た。迷。へ。謙。退。辞。讓。果。し。ま。け。と。水。右。衛。門。を。又。て。沈。吟。下。り。鳥。眼。と。

 たり。各。位。見。く。ら。ず。り。久。さ。う。推。辞。の。ひ。く。奥。の。酒。を。冷。ま。し。や。り。さ。ふ。く。と。

 い。も。り。茶。碗。も。と。ふ。三。つ。お。ま。の。各。盛。と。と。ど。も。吉。席。の。酒。燕。小。初。献。より。

盃。の。あ。下。ら。ぬ。お。ろ。く。下。に。詮。さ。る。天。任。と。則。吾。儕。が。活。業。の。獸。小。湯。あ。る。獵。夫。

 村。長。靴。拳。の。前。後。を。定。ん。の。後。の。つ。と。ま。実。も。ち。左。右。を。結。と。ん。け。ん。

 滅。却。抑。を。現。有。理。と。感。伏。一。然。ら。ば。一。拳。試。と。ん。ま。あ。る。さ。と。物。じ。く。三。人。

 の。小。き。對。ひ。丁。丁。と。ち。鳴。も。掌。の。拍。子。小。合。と。あ。る。手。下。る。手。擲。く。拳。

 滅。却。抑。を。兩。個。の。村。長。其。々。野。狐。の。世。と。り。真。利。水。右。衛。門。と。い。や。

 ら。さ。る。僥。倖。と。る。と。茶。碗。と。あ。ら。う。と。て。小。糸。が。酌。小。盃。を。さ。り。受。り。腕。を。喫。む。

 味。酒。と。羨。し。げ。小。き。祝。く。二。人。の。形。を。か。む。り。腕。も。負。て。今。更。は。も。立。ま。ぬ。腰。の。

 虫。小。鳴。く。秋。の。夕。暮。の。口。さ。え。し。さ。ぞ。あ。ら。う。け。水。右。衛。門。の。息。吹。あ。る。半。個。を。拍。

 こ。ち。よ。ら。る。妙。あ。ら。う。る。わ。ど。が。公。用。ひ。ま。さ。る。日。の。新。き。り。と。ま。い。泥。田。の。諸。息。

 佳。酒。と。あ。つ。と。と。溜。入。も。あ。ら。ぬ。も。畢。竟。吾。儕。と。抑。ま。ぬ。刀。拵。の。の。の。の。の。

 迷。迷。と。い。ふ。五。十。歩。百。歩。れ。新。き。り。昨。夕。耳。尾。と。う。ち。繞。ら。ま。り。て。あ。る。人。の。拍。子。

人倫訓蒙圖景云歌比丘尼ハ
りと清浄の立派ハ七熊野を
信地獄箱とて繪巻物入る
箱を携りて變相の
後死して諸方を
勸進まけり云云

哥比丘尼威姿



太平記と柳女衛

又云太平記詠々
近世より下まけり太平記を
流の物ゆゑあれ昔ハたみの
上あゆむしよれいこころづら
それなまなかくてもあれよう
祇園礼のりり下まけりむら
あれて座せぬ講釈めじもなき

三酔 客非 優と 救七小 糸が 居る 祝

け物のまけけ作の矮杓推何あれ畜生まげせ
あつてゆゑ貴く賣とに又化のけのものめハ
足を定めてまつるゝ類まのなせとら入る
摠鹿子よけ物蔭まけけ
湯島天神前
水右衛門
又えいり



獣藝魁水右衛門

先代の大橋普清は、ねむり三足捕つ。月額割て、あまの髪結て、あまの餅賣又、あまの牛も、あまの都の
猫も、あまのとらふ。のどく、あまの物死、あまの為と、あまの小唄、あまのうらふ、あまの鳴呼、あまのる、あまのや。あまの形、あまのの、あまの傍、あまのも、あまの似
と、あまの狸の、あまの曲、あまの舞、あまの兎の、あまの掉、あまの歌、あまの狼の、あまの高、あまの鳴、あまのう、あまの野、あまの猪の、あまの腹、あまのら、あまの声、あまの鹿の、あまの妻、あまの恋、あまのひ、あまの海、あまの瀬、あまのの
寐、あまの言、あまの牛、あまの馬、あまの六、あまの畜、あまの田、あまの三、あまの六、あまの禽、あまの声、あまのを、あまの吹、あまのた、あまのれ、あまの情、あまのを、あまの察、あまのし、あまの朝、あまの三、あまの暮、あまの四、あまのは、あまの押、あまの分、あまのる、あまの担、あまのか、あまのい
ち、あまのたる、あまの水、あまのを、あまの垂、あまのつ、あまの高、あまの貴、あまのの、あまの席、あまのへ、あまのも、あまのた、あまのれ、あまのう、あまの少、あまのや、あまのか、あまのる、あまの幼、あまの酒、あまの熱、あまの和、あまの郎、あまの達、あまのが、あまの分、あまの際、あまので、
侮、あまのら、あまのん、あまのと、あまの六、あまの僻、あまの事、あまのる、あまのる、あまの不、あまの学、あまのん、あまのふ、あまのこ、あまのそ、あまのと、あまの敦、あまの園、あまのハ、あまの威、あまの姿、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまのら、あまのん、あまの天、あまのの、あまの罪、あまの障、あまの重、あまの死
人、あまのの、あまのぞ、あまのあ、あまの報、あまのを、あまの揚、あまのて、あまのう、あまのち、あまの懲、あまのされ、あまのそ、あまのの、あまの方、あまのる、あまのぬ、あまのる、あまの死、あまのの、あまのま、あまのつ、あまのけ、あまのら、あまのん、あまの畜、あまの田、あまの生、あまのの
苦、あまのし、あまのら、あまのい、あまのら、あまのん、あまのい、あまの世、あまの彼、あまの世、あまのと、あまの生、あまのと、あまのえ、あまのて、あまのも、あまの物、あまのの、あまの報、あまのひ、あまのの、あまのあ、あまのら、あまのん、あまのと、あまの佛、あまのハ、あまの終、あまの了、あまの説、
あ、あまのひ、あまのぬ、あまのと、あまのれ、あまのが、あまのス、あまの方、あまのの、あまの日、あまのの、あまの奉、あまのま、あまのて、あまのハ、あまの三、あまの十、あまの代、あまの敏、あまの達、あまの天、あまの皇、あまの即、あまの位、あまの十、あまの三、あまの年、あまのと、あまのま、あまのら、あまのん、あまのこ、あまのろ、
高、あまの麗、あまのの、あまの僧、あまの惠、あまの便、あまのが、あまの女、あまの兒、あまの年、あまの十、あまの一、あまのて、あまの尼、あまのふ、あまのら、あまの善、あまの信、あまの尼、あまのと、あまの法、あまの名、あまのと、あまのは、あまの朝、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまのの、あまの持、
興、あまのる、あまの例、あまのを、あまの向、あまのハ、あまの提、あまの婆、あまの品、あまの八、あまの歳、あまの龍、あまの女、あまのの、あまのあ、あまのれ、あまのと、あまの汲、あまのむ、あまの熊、あまの野、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまのの、あまの地、あまの獄、あまの官、あまの善、あまのと

勸め、あまの悪、あまのを、あまの懲、あまのて、あまの婆、あまの々、あまの家、あまの々、あまのも、あまのを、あまの注、あまのる、あまのそ、あまのの、あまの流、あまのら、あまのれ、あまの後、あまの遂、あまのは、あまの佛、あまの名、あまの和、
の、あまの歌、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまの衆、あまの生、あまの海、あまの度、あまのは、あまの色、あまの鬼、あまのや、あまので、あまの小、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまの終、あまのて、あまの浮、あまの世、あまのの、あまの残、あまのを、あまのと、あまのひ、あまのと、
此、あまの竹、あまの柄、あまのお、あまの布、あまの囊、あまの似、あまのげ、あまのる、あまの各、あまの丸、あまのの、あまの角、あまの紙、あまの巾、あまのその、あまの角、あまの文、あまの字、あまのの、あまのい、あまのせ、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまの東、あまの園、
比、あまの丘、あまの尼、あまのの、あまの質、あまの定、あまのハ、あまの愛、あまの教、あまの昔、あまの男、あまのと、あまのの、あまの物、あまのの、あまの奉、あまのま、あまのも、あまの述、あまのら、あまのれ、あまのゆ、あまのめ、あまので、あまのた、あまの仏、あまの眼、あまのめ、あまのて、
ん、あまのれ、あまのが、あまのう、あまのて、あまのた、あまの畜、あまの生、あまの道、あまの才、あまのの、あまの罪、あまの犯、あまのを、あまのま、あまのら、あまのん、あまのと、あまの空、あまの君、あまのら、あまのれ、あまの水、あまのを、あまの垂、あまのつ、あまのそれ、あまのと、
む、あまのら、あまの口、あまの隠、あまのて、あまの又、あまのい、あまのふ、あまのゆ、あまのも、あまのら、あまのら、あまのら、あまの當、あまの下、あまの抑、あまの兵、あまの衛、あまの勅、あまの然、あまのと、あまの同、あまのぶ、あまのら、あまのら、あまの色、あまの比、あまの丘、
尼、あまの衫、あまの塗、あまの地、あまの衣、あまのが、あまのる、あまのせ、あまの浮、あまの世、あまのの、あまの垢、あまのを、あまのら、あまのめ、あまのて、あまの引、あまのひ、あまのま、あまのら、あまのる、あまの梓、あまの弓、あまのそ、あまのら、あまのと、あまの六、あまの名、
の、あまのも、あまの人、あまのを、あまの墮、あまのと、あまの地、あまの獄、あまの官、あまのこ、あまの罪、あまの重、あまのけ、あまのと、あまの彼、あまのと、あまのの、あまのも、あまの此、あまのと、あまのの、あまのも、あまの畢、あまの竟、あまの癡、あまの人、あまのの、あまの倉、
ら、あまのん、あまのと、あまの獸、あまの骸、あまのの、あまの獸、あまのと、あまのく、あまの唄、あまの比、あまの丘、あまの尼、あまのの、あまの腥、あまの臭、あまのと、あまの六、あまの尼、あまのの、あまの屁、あまの臭、あまのと、あまの不、あまの似、あまのら、あまのめ、あまのげ、あまのじ、あまのら、あまのん、
言、あまのの、あまのい、あまのび、あまのく、あまのあ、あまのる、あまのれ、あまのど、あまのも、あまの流、あまの布、あまのの、あまの軍、あまの書、あまのハ、あまの尋、あまのあ、あまのる、あまの中、あまの小、あまの太、あまの平、あまの犯、あまのハ、あまの殊、あまの更、あまのと、あまのま、あまのら、あまのも、あまのま、あまのら、
ぬ、あまのも、あまの弥、あまの重、あまのと、あまのと、あまのれ、あまのが、あまのや、あまの活、あまの版、あまのあ、あまの大、あまの字、あまのあ、あまの中、あまの字、あまのあ、あまの小、あまの刻、あまのあ、あまの平、あまの假、あまの名、あまの繪、あまの入、あまの横

引ひく。腰をひく。びん。つら。ひら。る。引。釣。る。釜。ハ。糸。ひく。也。田。の。浦。ハ
細。を。ひく。山。人。ハ。杣。木。ひく。けれ。ハ。二。人。で。抑。兵。衛。と。ひ。き。ま。せ。ぬ。三。人。碎。客。告。別。と。し
ら。ら。忘。三。肩。ふ。引。ひ。引。ひ。けれ。三。尺。口。の。門。柱。携。る。紙。藤。を。引。出。せ。踏。む。雨
後。の。新。漕。泥。は。尾。を。曳。飛。の。甲。井。戸。の。不。う。の。あ。が。ほ。し。と。小。糸。の。声。を。お。ひ。あ。が。る。雲。時
そ。ま。と。目。送。り。て。門。の。板。戸。を。引。く。ま。ふ。ひ。つ。て。ひ。ら。ま。る。けれ。ハ。嵐。ひ。ひ。れ
あ。ん。ひ。を。ま。ひ。や。す。ぬ。

第十四段

五明良人と認りて親戚全く聚り
印籠母子を合して旦那恥を知り

僑居。よ。の。い。と。く。意。ま。り。わ。ま。れ。初。夜。の。後。つ。ぐ。物。を。あ。そ。ぶ。涙。ハ
胸。の。ひ。く。糸。の。小。糸。ハ。ひ。ら。り。守。る。宿。小。窓。の。板。戸。も。破。庇。風。吹。入。り
新。燈。小。さ。く。む。久。ど。も。と。ふ。か。く。小。背。え。く。う。行。あ。り。火。桶。小。臂。と。り。て

あ。り。又。り。て。所。よ。か。く。文。字。も。ま。に。任。る。ま。ね。後。ご。ろ。ひ。が。使。い。何。を。ま。て
あ。ま。け。の。九。月。十。日。甲。夜。開。る。ふ。た。た。か。く。暮。と。も。ゆ。り。あ。ら。う。あ。ひ。や
の。せ。と。う。と。む。と。り。ご。ち。の。裁。通。り。門。を。小。出。の。又。入。り。の。待。小。口。む。し。き
妻。の。う。ご。み。待。り。ま。も。あ。ま。ま。ふ。む。の。と。ま。く。あ。み。ほ。ぞ。校。七。の。し。く。ゆ。り
ま。も。ひ。が。宿。ま。が。う。昨。今。ら。と。け。り。と。き。一。眼。を。門。の。戸。開。入。り。じ。く。小。糸。ハ
懸。く。の。燈。と。推。向。く。お。出。入。り。の。使。小。ゆ。り。の。ひ。ら。り。秋。の。ま。ま。さ。る。あ。ま。入。り。お
出。あ。る。風。れ。さ。わ。け。さ。け。み。と。り。ふ。と。て。け。み。の。限。ん。暮。と。も。ゆ。り。の。ね。ハ
ら。ち。の。い。と。ま。の。居。の。魚。の。さ。ま。の。胸。の。苦。さ。と。あ。ひ。や。り。の。あ。ら。う。あ。ら。う。怒
ら。う。涙。を。お。ひ。お。茶。の。茶。碗。と。も。小。受。を。さ。も。と。と。り。あ。ら。う。あ。ら。う。又。と。う。ら
か。る。の。の。う。う。統。條。丸。の。社。方。を。れ。ぞ。耳。引。き。て。あ。ま。母。よ。息。苦。い。ま。ま。の。巷。の
風。せ。い。ぬ。る。五。日。の。曉。天。小。忍。心。の。岡。の。わ。ら。う。あ。ら。う。人。を。殺。せ。癖。者。あ。り。これ。も



秋七
大徳
研川
来子

十
安
岡

市
之
子

市
之
子

激えと笑は終り。幼推さる別且。母を慕ふを操いと憑いたるあがら。面
 新定ふ結ぶたは。あらのまて樹もほ。人の今八十年限りの修の世。
 物のまぢりく損九石のうも張結れば。夫束狂ひて折易し。喃小系巨六
 等が好意をこの隠宅をたれども。貧乏のまてよとては。席薦は曲突不
 調金の賣居居れて二代の主と。壁は掛る破三弦の住捨。人の置土産秋の
 夜るれば。いづく深き操持のまて。妻時とも形るは世の真なる紙忘れん。
 とりのあゝ勤めて三弦を。うらりつら。著れば小系あはまて。まねど。まのれも
 夫を慰む。まてごころの。うらりつら。小系あはまて。まねど。まのれも。
 舟あはまて。うらりつら。小系あはまて。まねど。まのれも。
 浅草の朝ひは別且。待乳山遠離ゆく岸の松ひら。うらりつら。小系あはまて。
 藤倉のあり。日小系あはまて。まねど。まのれも。

よう大かたや忘れは。まのれも。まのれも。まのれも。
 妻あはまて。まのれも。まのれも。まのれも。
 下のめ。惜ぶまのれも。まのれも。まのれも。
 まのれも。まのれも。まのれも。まのれも。
 枕は。曲と直痛の。蒲團を腰へ引被る。小系あはまて。まねど。まのれも。
 和の。ぬまびの。舞と推辞と。舞と推辞と。舞と推辞と。舞と推辞と。
 家泉の洞窟。うらりつら。小系あはまて。まねど。まのれも。
 野千玉の夜の。舞と推辞と。舞と推辞と。舞と推辞と。舞と推辞と。
 十七日の月。雲の。家索。うらりつら。小系あはまて。まねど。まのれも。
 心さひ。越の。十兵衛。うらりつら。小系あはまて。まねど。まのれも。
 風。うらりつら。小系あはまて。まねど。まのれも。

十女鬻耳を側て穿ハ平く穿る声とそれあふぬ歎き入り小豆を翻るを
 倚て戸の節徴よりさ一覗み遠く早開ホをんめりり耳結て案内もせ戸の
 戸をのふふ引開て衝とと入る挑灯の火をま小糸の面をあいて吐嗟とをり
 うら騒ぐ胸の細子も狂ひつ。播遣り捨る三柱の井と所難る三の糸の舞
 其の端ととつゆさく。と十女鬻が怒まる声は揚るて二人一推るて袂と
 面をく二枚展風は真柴挿と持場の鳥とつれり糸首隠せ尾ハ出。蒲團を
 被と息もせと當下十女鬻背向より伏沈む小糸は對ひて声とつ三得
 世のま理とつゆさくをゆるぬ犬自物よ人の道りて口殺とも誘よの豆腐は送
 さらるづいおりの孫と五倫五伴を具足と人と生ま一人がひは初めして熱腸を
 冷人思ふお背く袂とつ逆電其爪をのぞく和女郎が淫奔うらも掃ひ
 悪人ホよまの辱の創とつも。あふるも念及遺とつ涙を慕ひ往方を雲に

圖宅三人が吐くまあふる孫とつぬ袂とつ嫌ひ阿徳が猛又彼夫よ今下び
 あつてのあつり何の逢とつととら歎くそれ又いつるあつるあつるぞと
 初とつその夜より彼とつ臥房の中お迷り物あり。それかまかつる。ととら
 甚く情由とつぬのつと尼よるととつ断り改替まて延ぬ阿徳が強面の
 せんか憎ととつて彼夫が和女郎おをすまきりけん家の子るる綱五郎刀袂と
 ころのれお身をたつ孫被とつ跡を連んととつ目より往方おれどこのあふ
 こそ語てより千万を皇の意思とつめて袂とつ家号とつ続とつ。綱五郎刀袂の被
 ち火仇は受まらその夜の騒擾被とつをくつる。それハ平とつ疲勞とつ郵るハ
 朽せくも戸を潰て二代三代相続せ。暖を簾の代は賣屋とつ写せる牌を掛ん
 る。うら歎くもあつる何の。緯の起るハ墳とつ嫌ひ阿徳がとつとつ。わつら
 とつとつてハわつらあつる何の。木嬰女尼の高院恩恵とつ背く。この世やとつ

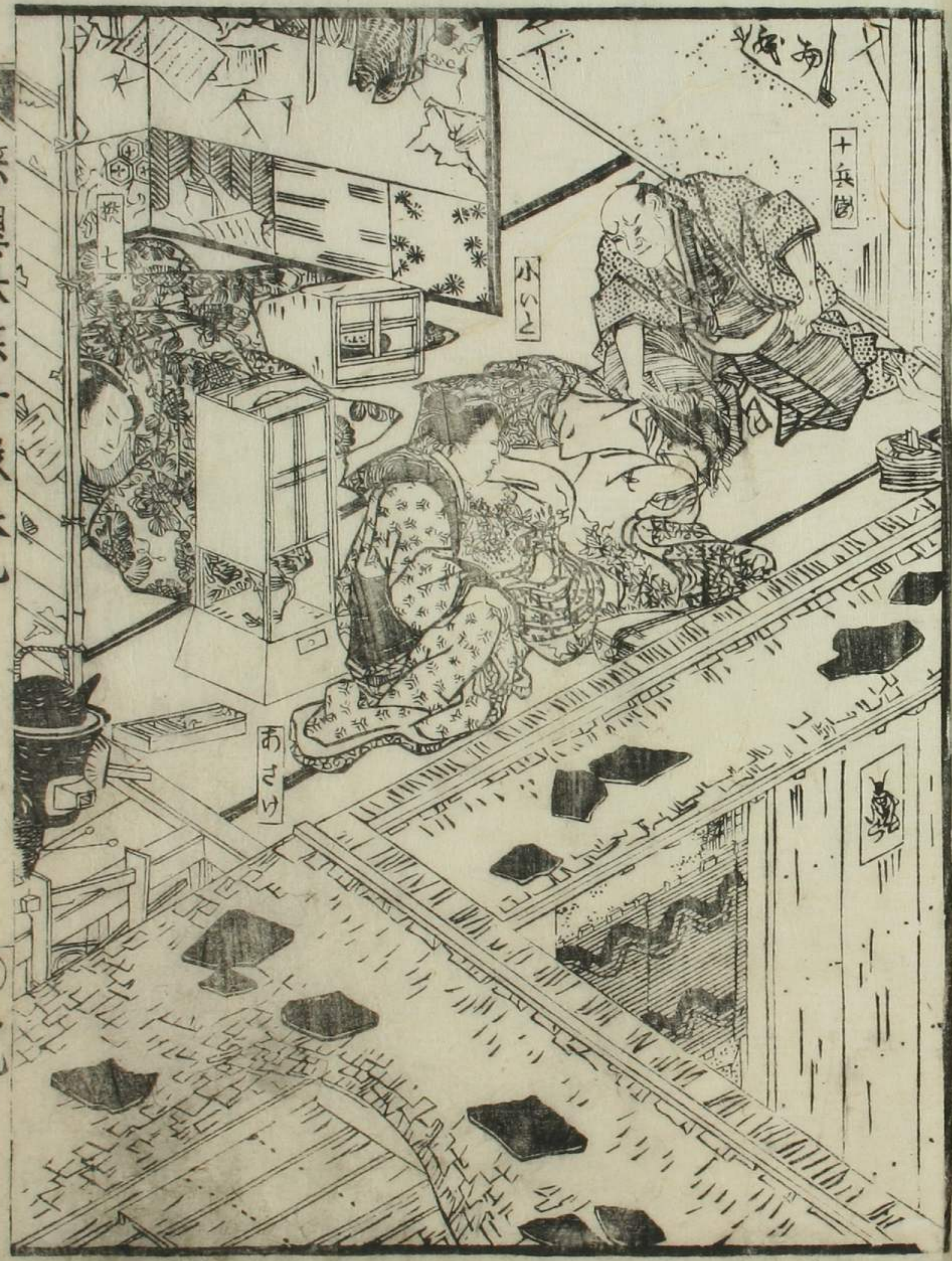
親と憑む。早雨小へ面をさる。おれは口くぐりのさるふに。さるふに。彼人の
 往方おれは存命か。とめは口くぐりの阿総が哀傷強面を夫と今又ふ。
 振く尾花が袖濡して風の便せ俵なる。はらばはあは病眼は腫眼は日ハ
 昏くは物の合もぬける大恩の綱五郎刀袷四子あまる十兵衛ホが目
 を振足して阿總を亡盲目なるも皇天の奸邪を掩ひぬるは達三人何
 たのく。彈つ歌ひつ暖まら。あは隠してさば。巨六が由縁の方より偏て
 人もおれは物も物の報ひいと速く。さるふその身を頼ふ世もまの依
 先の綱五郎刀袷の罪人のは。正も雅が為ぞ。みま是故と為るさる。かか
 恩義を恩義とさる情は。影さる。綱の魚楹の獸さる。も累る恩人の
 生死存亡の外はさる。その方が甲の甲さる。ひこら。宿遣入をさる。死
 不ゆるさる。不実男が昔と向へ恩棍の胤さる。氏も素姓も入るさる。生

育ふれとさるのうら。迷へばさる。あはさる。さる。杖と杖七が方を
 尻目おけいと高き。敦圍声。彼此へ洩さる。太平記流抑在。耳は立て
 溜ひさる。霞時。竊はく袖の中。隠さる。器械さる。身を折して。倚る壁の
 頬を擦ひぬる。簀子の下へ。溜る。おれ。水右。基つと。滅す。いひ。あは。後ぞ。
 暗に所は。立在。抑兵衛が。為。侍。闕。疑。さる。長。此。彼。存。さる。左。背。門。の
 か。お。寐。さる。裡。面。あ。い。十。兵。衛。は。殘。遣。ら。れ。て。改。と。權。は。空。目。の。細。小。糸。が
 ろ。さ。一。旦。胸。を。掲。う。て。雅。も。く。つ。れ。附。あ。る。ひ。感。ひ。て。過。失。と。め。さ。る。あ。る。も
 あ。は。け。と。甲。夜。と。さ。め。て。對。面。世。死。の。夫。と。その。夜。の中。お。の。は。に。て。り。共。は
 逃。け。る。淫。奔。の。の。世。は。又。さ。る。さ。る。の。は。縁。友。の。志。も。移。さ。る。綱。五。郎。が。お。て
 する。背。戸。の。阿。希。を。相。撞。て。階。お。け。和。安。郎。さ。る。さ。さ。と。は。縁。由。と。の。向。お
 向。さ。る。情。由。の。ぬ。さ。る。さ。る。の。由。定。ぬ。恋。風。の。竹。の。さ。る。各。は。肩。さ。る。さ。る。隨。は

いづれも靡くともふ今更なそ奴穿鑿せん為あわぶ。その過失をさや曉
 して改むる物も残らば彼七なる奴多ひ絶て今宵竊は彼人をあつめり。驚
 阿婆の志もあまふ。第ま六町の邸は異なるものなり。後の後を
 思慮し細五郎が仇快もさうまん只痛し。細五郎好む所はさうひら
 人の為よ命を惜まぬ人を殺て身と殺て過世の業因るべけれど怨角の比より
 まで護言つ亡夫の怪あわれ血を口にする実口が子小異るもどそさうあつ
 世の悪報るるとも鬼しく誦るうあめん。うら歎のともあつてと
 る和子が快美いり且とを果さんとさへ阿婆も痛く憎む。杖も怖るもど
 苦なり。人の世は生さぬ中の思ふどしと声曇る袖の雨を不宿く在
 るがら杖七の隠とみの痛團撥遣く生さや。とる物も面もさういふ胸を
 痛める夫のころるの奴も小まひいと哽う。阿婆もさうたが移て共さう

のこはよりの。浩如又外面八尺の笛吹とむ。旅虚を傍とむ。不
 夜りの奴おめめ。夜も普化禅師の屋を汲む。随縁真如口相の月と
 戴く天蓋は煩惱の雲のかられ。墨きこの栲衣腰は著る。笛裏の
 夜風は裏の衣の棲は軒の妻向上直下し立在る。跡跟来る捕の兵士
 暗の如く立つ。送る耳をさうあつて密詰の指。獲て左右へ引別。物の陰
 へぞ隠ひぬ。當下且雨の夜。小系さう向う移てあまふ。結る十巻を
 かつ。嘆息。表えり。五倍の理のせめても結とそ。このさうあつて
 中よ小系さう。辨のへ。身も彼もさう。あつて。思を受る。細五郎が
 るの奴仇ふせ。いと。さう。夫の為と。いひ。面もさう。杖七を不町へ
 かつ。あつて。身もさう。杖七を不町へ。杖七を不町へ。杖七を不町へ
 うと。あつて。杖七を不町へ。杖七を不町へ。杖七を不町へ。杖七を不町へ

不問其行及心



糸杉本良吉親老ナ



